

奈良・平城宮跡（第一六・一七次）

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六四年（昭39）二月～十月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
調査地は宮城の南面中央門である朱雀門とその内方に接する地区である。検出した主要な遺構は、朱雀門と東西両脇門、南面大垣の他、柵二条、掘立柱列二条、溝一五条である。
木簡は、門の内方にあるバラス敷の幅約二三mの道路の東西両側溝のうち、西側溝SD一九〇〇から九点出土した。SD一九〇〇は二つの溝が重複しており、上層溝は朱雀門の手前三八mで西折して門基壇部を避けて南流し、下層溝は南へ直進して門基壇によって断ち切られている。したがって、この下層溝は朱雀門造営以前のものであり、平城宮造営以前に存在した下ッ道の西側溝であると考えられる。木簡が出土したのは下層溝からである。
- 8 木簡の釈文・内容

(1)・「関々司前解近江国蒲生郡阿伎里人大初上阿□勝足」
 〓石許田作人〓

・「同伊刀古麻呂 大宅女右二人左京小治町大初上笠阿曾弥安戸
 送行乎我都 鹿毛牡馬歳七 里長尾尾治都〓

〓人右二 留伎 〓
 656×36×10 011

(2)・
 □□

×事

捉人守人連奉

・×得□□□
 (旨上カ)

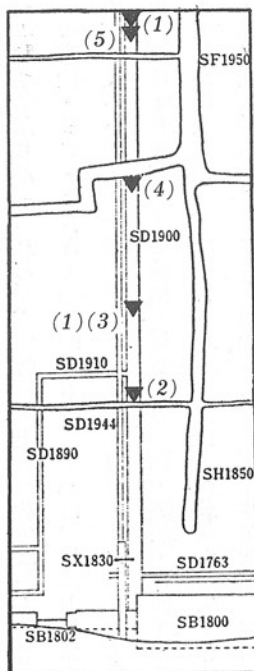
□□
 (201)×(51)×5 019

(3)「>大野里五百木部□米五□」
 222×36×6 031

(4)宮□□
 (178)×(38)×4 081

(5)高田寺□□□□□□□□
 (239)×(9)×7 081

(1)は過所符で、八世紀のものとしてはじめて出土したものである。木簡の年代については、次のように考えられる。まず上限は、「大初上」と記されて、大宝令以後の位階制によっていることから、大宝元年（七〇一）三月以降と考えられる。次に下限については、『令集解』公式令内印外印等条所引の古記によれば、大宝令では過所符は「便に随い竹木を用う」とされていたが、霊亀元年（七一五）



木簡出土遺構図

岸 俊男
奈良国立文
化財研究所
同

『平城宮跡発掘調査報告』Ⅸ
一九七八年
(清田善樹)

田村吉永

「平城京址発掘木簡の左京小治町につい
て」(『大和文化研究』第一〇巻二号)
一九六五年

宇野茂樹

「近江国阿伎里阿伎氏族について」(『史
跡と美術』三五五号)
一九六五年

滝川政次郎

「過所考」上・中・下(『日本歴史』第一一
八〜二二〇号)
一九六三年

9 関係文献

には過所符に諸国印を捺すことになり、過所符には原則として竹木
を用いなくなったこと、(d)地名表記が国郡里制によっていて霊亀元
年の郷里制の施行以前であること、(e)SD一九〇〇の下層が霊亀元
年にはその存在が確認できる(『続日本紀』霊亀元年正月甲申条)朱雀
門の基壇によって断ち切られている等のことから、霊亀元年以前の
ものと考えられる。

奈良・平城宮跡（第一八次）

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六四年(昭39)五月〜六月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代〜平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第一八次調査は一九六四年(昭和39)、宮の西辺——西面
中門(佐伯門)と同南門(玉手門)の中間の地域でトレンチ発掘を行な
ったものである。調査区全体は南流する秋篠川の旧河道にあたり、
宮造営時の埋めた後東西幅約二五m、深さ約一・一mのくぼみ
が残っていたことが知られた。遺構はこの上に認められ、東西に走
る掘立柱塀等その他、特徴ある遺構を検出した。それは、南北三・五
m、東西四m以上の方形の区画に木杭をめぐらした施設であり、そ
の内側には径一・四m、深さは〇・七mをこえる円形の土壇が掘ら
れていた。この杭列と土壇は一連のものと考えられ、土壇内の木炭
を多くふくんだ堆積土中の遺物から、この地区に鍛冶関係の工房の
存在が推定できるのである。木簡も一九点が右の土壇より出土し、